

関西学院大学 研究成果報告

2026 年 4 月 2 日

関西学院大学 学長殿

所属： 社会学部
職名： 教授
氏名： 松宮 園子

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	☒ 特別研究期間 ☐ 自由研究期間 ☐ 大学共同研究 ☐ 個人特別研究費 ☐ 博士研究員 ※国際共同研究交通費補助については別様式にて作成してください。
研究課題	アガサ・クリスティ作品における「凡庸な悪」の諸相
研究実施場所	大学内個人研究室、大学図書館、自宅
研究期間	2025年 4月 1日 ～ 2026年 3月 31日 (12ヶ月)

◆ 研究成果概要 (2,500字程度)

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

本研究は、拡大を続ける戦間期研究の中でも特に21世紀に入り発展が著しいミドルブラウ文化研究の一環として、1920年代から70年代の長きに亘り活躍した「ミステリの女王」アガサ・クリスティが描く「悪」の諸相の変遷を、ファシズムの台頭、ホロコーストの衝撃、同時代におけるマスメディアによる犯罪表象の氾濫と関連づけながら辿るものである。ハンナ・アーレントの「凡庸な悪」の概念を巡る議論を補助線に、一般社会に生きる「平凡な」市民が犯す悪というテーマに所謂「ハイブラウ」なテキストとは異なる種々のアプローチでクリスティが取り組んだ軌跡を精査することで、従来フェミニズム的視点に偏ってきたクリスティ再評価の新たな深化を試みることを目指す。人間の本質的悪といった倫理的テーマは、伝統的には黄金期ミステリ及びミドルブラウ文学の範疇ではないとされ、クリスティの描く女性キャラクターの現代性、境界侵犯性がフェミニズムの見地から広範に議論されるようになった今日においても、彼女が提示する「悪」や「正義」の概念が議論される機会は限定的である。こうした批評的空白を補い、クリスティが人間の「悪」という根源的テーマに終始取り組み、広範な読者層の揺れ動く倫理観に多大な影響を及ぼしてきたことを明示するための具体的な研究成果を、以下個別に記す。

1. 国際学会発表 “Woolf and Christie: Two Thoughts on Evil in the Interwar Years”
2025年7月5日から8日にかけて英国ブライトンのサセックス大学で開催された、34th Annual International Conference on Virginia Woolf: Woolf and Dissidence におけるセッション “Contemporaries 4” で単独での口頭発表を行った。従来の「ハイブラウ」と「ミドルブラウ」

という枠組みを越えて俯瞰すれば、ヴァージニア・ウルフとアガサ・クリスティという同時代の作家は共に、第二次世界大戦開戦を間近に控えた1930年代後半に、家庭内という私的世界における「悪」と、戦争に代表される公的世界における「悪」の連関に注目していたことがわかる。ウルフの『三ギニー』(1938)とクリスティの『そして誰もいなくなった』(1939)を中心に、各テキストにおける父権制社会と戦争、権力の渴望の図式を精査する一方、二人の作家の異なるジェンダー観を論証する本発表の結果、同室の他の3名の発表者及び聴衆と有意義な議論を交換することができたことは大きな収穫であった。

2. 共編著書『キーワードで読むウルフ』出版

2025年9月に小島遊書房から刊行の本書について、8名の編者の一人として約50名の執筆者の原稿の集約、編集作業全般に携わる一方、「第1部ウルフ主要作品」中の項目「『自分ひとりの部屋』(1929)——時空を超えて広がる、さまようための「ルーム」」(pp.78-86)の執筆を担当した。本項目では、アーノルド・ベネット、キャスリーン・レイン、レベッカ・ソルニット等の幅広いテキストに言及しながら、おそらくウルフの作品の中でもっとも有名なこのエッセイが秘める解釈可能性の豊かさと現代性を論じた。本書は前述のとおり、クリスティの同時代人でもあり、フェミニズムや平和主義の文脈で近年特に多様な領域で関心を集める作家ウルフの作品及び生涯について、日本ヴァージニア・ウルフ協会会員の研究成果を一般読者に開かれた形で集大成したものであり、2026年1月には増刷されるという大きな反響を得ることができた。

3. 翻訳書 ピーター・キャメロン著『アンドラ』

クリスティが20世紀を通じて牽引した結果、「ミドルブラウ」という枠を超えて現在に至るまで世界的に発展と成熟を続けるミステリ・ジャンルが生み出した変奏の一つの形として、アメリカの現代作家ピーター・キャメロン(1959～)が1997年に出版した長編小説『アンドラ』の日本語翻訳を手がけた。一人称の語り手がヨーロッパの小国アンドラを旅する記録という体裁を取る本作は、旅行記やファンタジーというジャンルを思わせながら、じつは陰惨なミステリであることが結末で明らかになるという、きわめてユニークな作品である。「悪」を秘めた語り手の声によって読者の共感が操作されるさまを翻訳という行為を通じて商才に分析することは、クリスティ研究においても非常に有益であった。すでに完成した翻訳書は2026年度中の刊行を予定しており、この優れた現代作家の小説を改めて日本の読者に紹介することにも大きな意義があると期待される。

4. クリスティ研究関連単著執筆

クリスティ作品における悪の概念の変遷を、21世紀の各種アダプテーションを通じて精査することで、その文化的及び倫理的意義を検証する単著の執筆を進めた。映画及びテレビドラマによるアダプテーションを日本版も含め複数取り上げ、これらの映像作品が「アガサ・クリスティ」の英国性をブランド化する一方、原作に潜む複雑な悪の諸相を時に隠蔽し、時に新たな視座を提供している現状を分析するものである。第1章では名探偵エルキュール・ポアロの最後の事件である『カーテン』の原作小説と、その唯一のアダプテーションである2013年のテレビドラマ版について考察する。第2章ではクリスティ作品に頻出する「正義の殺人」のテーマが最も劇的な形で扱われた『オリエン特急の殺人』(1934)の、1974年版及び2017年版映画、英国ITV制作の2010年版テレビドラマ、そして2015年に日本でTVドラマ化されたヴァージョンを比較することで、本作のエンディングが如何にそれぞれの視聴者に受容されやすい形で改変されているかを検証する。第3章では『ねじれた家』(1949)とその2017年の映画版を題材に、家族内の「悪」と遺伝について考察する。第4章では代表作『ABC殺人事件』(1936)のきわめて斬新なアダプテーションである2018年のテレビドラマ版を議論の中心に据え、「改変」という芸術的手法の可能性を改めて探る。このような構成を軸に単著の執筆は順調に進んでおり、完成の暁には21世紀の世界におけるクリスティ作品の意義を明示できるものと期待される。

以上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

※個人特別研究費：研究費支給年度終了後2ヶ月以内 博士研究員：期間終了まで

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※特別研究期間、自由研究期間の報告は所属長、博士研究員は研究科委員長を経て提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。